
薔薇の散り際

錨晋太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇の散り際

【Nコード】

N4867I

【作者名】

錨晋太郎

【あらすじ】

カトウル帝国の侵略によりシェレネ国は滅びに瀕していた。進軍を阻止すべく戦場を駆けていたエミリオも、ある日敵の矢を受けて海に沈んだ……はずだった。九死に一生を得たエミリオが目覚めた時、目の前にはシェレネ国の守護神を名乗る女性。呆然とするエミリオに彼女は告げる「シェレネ国はもう、カトウル帝国の支配下にある」

序章 だからお願いもう一度だけ奇跡を

奇跡だとエミリオは思った。これはもう奇跡以外の何物でもない。海水を含んだ衣服が容赦なくのしかかる。ともすれば倒れそうになる身体に鞭打って、クロワを岩場に引き上げた。今年で十四になる少年の身体は、エミリオの想像以上に重かった。

「クロワ、おい、大丈夫か？」

青白い頬を軽く叩けば、クロワは大きく咳き込んだ。エミリオは胸を撫で下ろした。途端、疲労が押し寄せてくる。

「りお……姉」

息も絶え絶えにクロワが呼ぶ。

「泳げ、たの……か？」

「奇跡の生還を果たした第一声が、それ？」

エミリオは力なく苦笑した。

「同じことをもう一回やれって言われても無理。二回も奇跡は起こせないよ。さすがの私でも」

空は快晴。頬に当たる潮風が心地よい。目の前に広がっているのは、二人を呑み込み損ねた海。穏やかな顔をしてやることはあげつない。だから海は嫌いなんだ。女みたいで。

「次はアンタが助けてね」

エミリオは岩の上に寝そべった。本当に驚いた。集落の子供では一番泳ぎが上手いクロワが溺れているのを見て目を疑い、とつさに海へ飛び込んだ自身の行動に正気を疑った。しかしなによりも驚いたのは、万年カナヅチだった自分が少年一人を抱えて岸まで泳げたことだ。人間、死ぬ気になれば何でもできるものである。

「……クロワ？」

返答がない。いぶかしんでエミリオは体を起こした。浅い呼吸を繰り返すクロワは腕で目を覆っていた。波間に嗚咽が混じる。彼は泣いていた。

当然だ。危うく死ぬところだったのだ。戦場で暴れまわるエミリオとは違って、クロワは粹がっついていてもまだ十四。怖かったろう。

エミリオは幼さの残る顔に手を伸ば——そうとした。

強烈な殺気に肌が粟立つ。とっさに身を屈めたエミリオの背に熱が走り、続いて痺れるような痛みが爆発した。体勢を立て直そうとしたら今度は肩に衝撃——矢だ、と知覚した時には身体が後ろへ飛んでいた。

「リオ姉えっ！」

悲鳴に似た声。目を見開くクロワの頬に手を伸ばそうとしたが、背後から引つ張る力には抗えなかった。

のけぞり海に身を投げ出す格好になったエミリオは雲一つない晴天を見た。あまりの青さに一瞬泣きたくなったが、感傷に浸る時間はなかった。海に吞まれる。沈む間際に頭に浮かんだことは諦めに近かった。

さすがに、二度目は無理だろうな。

一章 だからお願いこの手を掴んで（１）

嗚咽が聞こえる。

小さい子供のしゃくりあげる声だ。涙を堪えきれない、が、それでも堪えようとする。あまりにも必死な様子が伝わってきて、エミリオは苦笑した。

意地張るなよ。堪えなくなっただけいいじゃないか。

エミリオはその子供に手を伸ばした。

岩に叩きつけられる波の音でエミリオは覚醒した。背中には硬い岩の感触。頬には生温かい潮風。ずいぶん長いこと闇の中を漂っていたような気がする。霞がかかったかのように思考がまとまらない。釣りをしようと約束して、でもクロワの姿がなくて海岸沿いをつぶさに探し歩いていたら、どういうわけか彼は溺れていて——エミリオの脳裏に目を見開くクロワの顔が鮮明に蘇った。それに伴い、記憶が流れ込む。

矢で射抜かれたのだ。とっさに肩を押さえたが、痛みはおろか痺れのも無かった。傷一つない。だが、夢ではないことを誇示するかのように服には穴が開いていた。ちょうど矢じりの大きさだ。位置といい、射抜かれた事実には間違いはない。

「エミリア」

澄んだ声。エミリオは顔を向け——そして、百を数えるほど固まった。

絵画から抜け出たような絶世の美女がいた。それ自体が光を放っているような髪は輝く黄金色。薔薇のように深紅の唇。真珠を溶かしたような肌は日焼けとは無縁なもののように思えた。

「……シエレネエラリス」

感嘆の息とともに女神の名前がエミリオの口から零れ落ちた。彫像かと思われた美女はその愁眉を僅かに顰めた。

「よく余の名がわかったな」

「は？」

「今、呼んだではないか。シエレネエリス。余の名だ」

どこことなく尊大な態度もこの美女なら許されるような気がした。

エミリオは額に手を当てた。これは夢の続きか。

「まさか、自分がこの国の守護神のシエレネエリスだとかは言わないよね？」

「守護神になんぞなった覚えはないが、この海一帯を統べるシエレネエリスとは余のことだ」

「人をたばかるなら、まずはまともな名を考えるといい。うちのガキどもだってもう少し信憑性のあることを言っよ」

しかし所詮、十かそこらの子供が考えることだ。エミリオには大抵お見通しだった。どっかの子供と喧嘩して泣かせたとか。いい歳しておねしょだとか——ああ、そう言えばクロワはどうなった。こんなところで非現実には浸っている場合じゃない。

「私と一緒にいた男の子は知らないか？」

「知らぬ。余が拾ったのはお前だけだ」

「海に落ちたのを助けて毒消しして怪我も跡形もなく治してくれたんだ。それはどうもありがとう」

エミリオは頭を下げた。

「ところで、どうやって？」

「余を誰だと思っている。傷を癒すなど造作もない」

「まあ神様なら傷を治すくらい簡単にやってのけそうだけど、私はあなたがどうやってやったのかが気になる」

「実際、容易いことだった。何しろ余は神だからな」

真顔で言つてのける自称シエレネエリス。エミリオは会話が全く噛み合っていないことに疲れを覚えた。

一章 だからお願いこの手を掴んで（２）

「あのな、シエレネエラリスさん」

「お前にはシエレネと呼ぶことを許そう」

「あ、それはどうも」

頭を下げてからエミリオはなんかおかしいことに気付いた。しかし本人はそうは思っていないらしく胸を張った。

「うむ、光栄に思え」

やたらと尊大な態度といい、人間離れした美貌といい、本当にシエレネエラリスではないかと錯覚しそうになる。そんな馬鹿な。とりあえずエミリオはこれ以上、彼女の正体については言及しないことにした。話が進まない。重要なのは彼女が何者かではなく、自分の命の恩人だということだ。

「じゃあ、シエレネさん。えーっと……お礼をしたいところなんだけど、今はその、持ち合わせもないし、クロワのことも気がかりだし、一端落ち着いてから改めてお礼に伺ってもよろしいでしょうか？」

「よかるう」

「重ね重ねありがとう」

もう一度頭を下げて、エミリオは立ち上がった。眩暈は起きない。身体に異常も見当たらなかった。これがいわゆる癒しの力によるものだとすれば大したものだ。緩んでいた帯を締め直して洞窟から顔を出す。

太陽は丁度空のてっぺんに到達していた。釣りをしに家を出たのは朝だった。急いで戻らなければ、四日後には最終決戦を控えている。

「ああ、そう言えば」

エミリオは振り返った。

「どうして私の名を？」

質問の意図を探るように自称シエレネエリスは愁眉を顰めた。

「エミリアって呼んだよね？ それを知っているのはファリスやクロワ達くらいなんだけど……」

「余を誰だと思っている」

「守護神シエレネエリス様に知らないことはないわけですか」

至極当然のように自称シエレネエリスは頷いた。はったりもここまですれば大物だ。

「では、ひとまずお暇させていただきます」

「余はしばらくここにいます」

端整な顔に陰りが生まれる。憐れむような眼差しはエミリオに向けられていた。

「どうせすぐに戻ってくるだろうしな」

エミリオは首を捻った。意味がわからない。しかし、はやる気持ちが必要な違和感を打ち消した。今はとにかく、クロワの安否を確認しなければ。そして、自分を襲ったカトゥルの連中がどこまでこの国に侵攻しているのかを調べなければならない。

決戦を前にして、やるべきことは山のようにあった。

一章 だからお願いこの手を掴んで（3）

集落に戻って最初に感じたのは、違和感だった。何か違う。それは雰囲気だったり、建てられている家の造形だったり、見張り櫓に人がいないことだったり――狭い集落である故に余所者は目でわかる。だが、今は道行く全ての人に見覚えがなかった。

一瞬、帰る場所を間違えたのかとさえ思った。

ここが間違いなく自分の故郷フィロスだと確信し、しかし自分の知っているフィロスではないことを悟ったのは、自身の家に戻った時だった。

集落からも少し離れた場所に位置する家は、大人数の兄弟が共に暮らすには狭かった。雨漏りする屋根。三日に一度は外れてその度に修理していた戸。おんぼろの小屋だったことは認めよう。しかし、数刻で跡形も無く消え去るほどやわな建物ではなかったはずだ。ただの空き地となっていた小屋跡地に、エミリオは声も無く立ち尽くした。隅に石が建てられているのを見つけた時には思わず笑い出しそうになった。実際には、口元が引きつって、乾いた笑いしか出てこなかったが。

墓石よろしく建てられた石には、エミリオ「フィロスと刻まれていた。

冗談にしては大掛かりだし、悪質だ。もしやと思い、地面を掘り返してみれば案の定、箱に納められ、丁寧な布にくるまれた弓と矢筒。釣り道具一式が顔を出した。死者に対する扱いだ。完全に弔われている。死んだことになっている。短時間、行方不明になっただけで。どれだけ気が短いのだ、あいつらは。

不意に、人の気配を感じてエミリオは振り向いた。

「そこで何をやっているの？」

陰を含んだ物言い。片手には何のつもりか花を携えている女性。皺と白髪も増えて随分印象が変わっていたが、面影は十分以上にあ

った。

「ベリアおばさん」

名を呼べば、女性は眼を見開いた。

「あなた……」

「何があつたんですか？ クロワ達は？」

エミリオは一步、歩み寄った。女性――ベリアは三步、後ろへ下がった。信じられないものを見るかのようにベリアは首を横に振った。

「……誰？」

「冗談はやめてくださいよ。エミリオです」

「やめて！」

かん高い悲鳴にエミリオは足を止めた。自分を見るベリアの顔に浮かぶのは、紛れもない恐怖だった。

「海の魔物ね。私をたぶらかす気？ 七年前のあの子の姿で現れるなんて……っ！」

今度はエミリオが驚く番だった。その隙にベリアは脱兎の如く逃げ出した。小さくなっていく背を視界に入れながら、エミリオはその場から一步も動くことができなかった。

「七年、前……？」

わけがわからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4867i/>

薔薇の散り際

2010年10月8日13時40分発行